

わが心の遍歴

(1)異文化との出会い

花岡 永子



花岡 永子(別姓:川村 永子)/かわむら・えい
1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教哲学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学科博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化学研究科教授として哲学、宗教哲学を教える。著書は『宗教哲学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教哲学』(新教出版社、'94)、『神と宗教哲学』(北樹出版、'94)、『キルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

花岡永子先生は、「自己の生死の問題で先ずキリスト教に入信し、自己と根源的には全く一であるような他己の生死の問題で禪に参ずるようになった」と過去の書物の中で述べられている。また自らを「禪に生きながらのクリスチャン」とも言う。

禪の中に「師家^{しけ}」という言葉があり、辞書を引くと「学徳のある禅僧。特に、座禅の師をいう。ノ専門道場において参禅する者の指導にあたる僧で、正しい禪の伝統の法を継承する師について印可を得て、その法を嗣ぐ者でなければならない。一般に親しんで『老師』と呼ぶ」とある。1978年に禪の修行に入られた花岡先生は、女人禁制の相国寺僧堂での修行も、京大名誉教授、西谷啓治博士(漢語学大師)の推薦により許可され、1987年印可証を授与され老師の資格を与えられた。女性の老師である。

現在は、大阪府立大学大学院で教鞭をとるかたわら、世界各国の大学、世界哲学会、東西宗教交流学会、国際神学会などに出席、数多くの講演をこなしておられる。禪に入る以前に20年間クリスチャンであり、禪の修行に入ってからさらに20年の月日を経てこられた先生に、ご自身の中での「キリスト教と仏教の出会い」をはじめとする様々な考察を、「わが心の遍歴」として8回にわたり寄稿していただくことになった。

* * *

1. H.ティーリケ先生との出会い

1965年の初夏に、ドイツのハンブルクに今は亡き夫と2年程の予定で留学したが、様々な理由によって、結局は8年半もの年月をハンブルク大学で過ごすことになった。夫は日本学教室で働くかたわら、哲学科での研究を始めた。筆者の方は神学部の組織神学科で、日本での宗教哲学の研究を更に続けることにした。その1年前の1964年5月から9月まで、京大の文学部時代に筆者の主任教授であった西谷啓治先生(1900-1990)がハンブルク大学の客員教授であり、更に、京大の大学院文学研究科時代の筆者の主任教授であった武内義範先生も1964年にハンブルク大学にご滞在であった。その関係で、武内先生のご推薦状を頂いて、神学部では、H.ティーリケ先生(1908-1986)のご指導を頂くことになった。

これは、筆者の将来を決定するような大きな出来事であった。

というのも、ティーリケ先生は、学生時代は難病で車椅子で学校や大学に通われた方で、その上第二次世界大戦の間、大学での講義や旅行は勿論、キリスト教会での説教も禁止されていたにもかかわらず、命懸けで説教活動だけは続けられ、ヒットラーとの闘いを闘い抜いて来た方であり、大変な戦争体験をお持ちであったからであった。

2. 祖父の教育

筆者が両親の反対を押し切って宗教哲学の道を歩み始めたのは、第二次世界大戦の折りに疎開した長野県上田市での様々な体験やその後の日本の食料難や人心の乱れ、あるいは肺結核等との闘病生活の経験を経、あるいは、1950(昭和25)年に父の転勤でその後、7、8年住むことになる、初めて行った広島、原爆投下による焼け野原のままのむごい町の姿に接したからであった。第二次世界大戦がなかったならば、筆者はこのような厳しい学問の道に進むことは全く無かったであろう。

子供心に先ず思ったことは、人間は戦争を絶対にしてはいけないということであった。戦争中であるにもかかわらず、医者であった祖父は、人間は敵であろうが味方であろうが怪我をした人々には医師として、差別なく治療しなければならないことを色々の童話や、実話を通して教えてくれた。ドイツに医者として留学中に第一次世界大戦が勃発し、スパイと間違えられてスイスによって救われた祖父は、最後まで絶対平和主義者であった。筆者は祖父からのこのような教育を受けた結果、永世中立国のスイスが大好きであり、敵味方なく傷病兵たちを看護したナイチンゲールのお話忘れられない。

戦争を契機に知ったもう一つのことは、疎開先の上田市で経験した田舎の素晴らしさと、その素晴らしさにもかかわらず、幼子にも時々突如として襲ってくる文化への飢えであった。田舎は、本当に素晴らしかった。山の木々はいつも緑であり、川の水はい

つも清らかで、動物は自由に遊び、あちこちの木々には沢山の果物が色とりどりに実っていた。勿論、そこで、東京から疎開して生き続けることは容易ではなかった。荒地を開墾し、そこにカボチャやサツマイモや麦等々色々なものを植えて命を繋いでいくことは、大変な労働を幼子の筆者にも課した。しかし、その合間に祖父が薪拾いを兼ねて連れていってくれた山々は、松風の吹く素晴らしい山々であった。幾度か道にも迷って、子供心にも夕暮れの山奥で命の危険を感じたこともあった。しかし、それでも山々の木々の上で、ターザンのように遊ぶのが、堪らなく爽快であった。けれども、田舎の文化は、戦中、戦後のこともあってか、幼子の心にも余りにも貧弱に思えた。

3. 文化への飢え

疎開先では、小学校に通う道は、2キロ余りの田圃道であった。その道は、学校の宿題に出された、食用のためのイナゴ100匹を採集するには都合がよかった。しかし、一面の田圃をみると、緑の美しさや黄金の実りの豊かさ、労働の報いの喜びだけではなく、文化の無さの悲しみが、ひしひしと胸を締め付けてくることをどうすることもできなかった。この悲しみを既に小学校1年生の登校時に味わっていた。敗戦後、命からがら満州から帰国してきた父は、単身赴任の東京の研究所から毎月少女向けの一冊の星の観察の本を送ってくれた。これが、教科書の他に読める唯一の本であった。これを毎月楽しみにして待ち、隅から隅まで何度も読んでいた。また、物々交換で全てのものを交換し果てて、何も無い部屋にたった一つ残されたピアノで練習し、1里離れた先生のところへレッスンを受けるのが唯一の楽しみであった。が、これも過労で両肺の結核に倒れ、半年程絶対安静の床に伏し、ただ虚しい闘病生活を小学校5年生で経験することになってしまった。

田舎では、都会からの疎開者は厄介者のように見なされていた。なにしろ、鋏もよく使えないからだというのである。「都会の人々は、牛や豚のように肉を食べることもできないので、牛や豚以下の役立たずである」という言葉を田舎の人々が話合っているのを聞いて、ショックを受けたこともあった。そんな折も折り、病気の治らぬままで、父の転勤で広島に引っ越し、原爆の落ちた

後の焼け野原を見、大変なショックを受けながらも、開墾の重労働が無くなり、父を含めた家族全員で生きることの喜びのうちで、いつしか、病も治った。しかし、原爆で負傷した沢山のお友達や先生方と接することによって、原爆の恐ろしさや社会の矛盾に気づき始め、宗教哲学や神学を学ばなければどうにもならないような状況に、自覚しないままに近づいて行った。

4. H.ティーリケ先生の神学

ティーリケ先生は、先ずレッシングで博士の学位論文を書かれたことから分かるように、理性を重視しながら信仰を貫かれようとされた。従って、大学のゼミでも、種々の学部と合同ゼミを試みられた。例えば、神学部のゼミで心理学専攻の教授とその学生たちとの合同ゼミを、あるいは生物学研究室の教授とその学生たちとの合同ゼミを開催して、他領域を相互に学習するという仕方である。そして、その上で、神学の問題を考察されようと試みられた。この意味では、ティーリケ神学は、この世の出来事の次元である水平次元と神と人間の個人の自己との関係から成り立つ垂直次元との交錯するところで成り立っている神学であると言える。つまり、この世の出来事を理性で考察するレッシング的な立場と、神対自己の関係の中での信仰の立場との交錯するところで、ティーリケ神学が成り立っている。

ティーリケ先生は、かつて難病で治る希望のないことを知ったとき、そのままでは、大量の薬を一度に秘密で飲むことによって、生か死かを選ぼうとされた方であった。その結果、大量の薬のショックで難病が奇跡的に治ってしまわれた。先生は、世俗と信仰(プロテスタント)にいつも同時に生きようとされ、神学も両次元で成り立つ神学を模索されていた。従って、現代のどのような次元の問題にも、神学は答えることが出来なければならないと考えていらした。

現代の非神話化の問題にも、神話を実存論的に解釈することによって信仰の真理を失ってしまう危険を冒すよりは、もう一度神話のレベルで神話の語ろうとすることを理解すること(再神話化)を提案された。信仰のみならず、現実をも同時に重視するティーリケ先生の神学は、筆者に絶大なる影響を与えたのであった。